

日本の小説とHIV／エイズ

大 池 真知子

広島大学大学院総合科学研究科

Representation of HIV and AIDS in Japanese Novels

Machiko OIKE

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

This paper analyzed the representation of HIV and AIDS in Japanese novels since 1980 and contextualized this representation in social discourse related to the disease. It also considered the kind of novels that are likely to be written in the present decade. During the 1980s, when the first AIDS panic seized Japanese society and the notorious AIDS Prevention Law was enforced, Masahiko Shimada, a well-known postmodern satirist, wrote *Mikakunin-bikō-buttai* (*An Unidentified Stalking Object*). In this novel, AIDS was represented as the comical, but radically subversive, figure of a transgender stalker, thereby questioning the exclusion and containment policy of that time. In the 1990s, after the second AIDS panic hit the nation, lawsuits concerning HIV infection among hemophiliacs drew public attention, and the Communicable Diseases and Medical Care Law was introduced. As a result, the Japanese public became better informed about the disease. At that time, Jakuchō Setouchi, a novelist and Buddhist nun, wrote *Aishi* (*Love-Death*). In this novel, Setouchi depicted the lives of various types of people living with HIV, including a gay activist, a housewife, and a hemophiliac; despite their suffering, their positivity was presented vividly. However, in the process, the novel almost romanticized the disease. At the turn of the century, when the problem of HIV in Africa began receiving international attention, the Japanese started losing interest in HIV as a problem that particularly concerned them. However, in a bold attempt to tackle the issue of HIV and Africa, Hōsei Hahakigi, a novelist and psychiatrist, wrote *Afurika no Hitomi* (*The Pupil of Africa*). In this novel, a Japanese doctor exposed the scandal of the government of a southern African nation—the thinly disguised Republic of South Africa—and a pharmaceutical company concerning HIV drugs. Nevertheless, as a fictional work, it almost trivialized the HIV drug controversy. In the present decade, now that the focus of attention with HIV in Japan has returned to gay men, it is to be expected that novels will be written about gays and other vulnerable groups, such as sex workers, young people, foreigners, and drug users.

はじめに

本論では、エイズをテーマにして書かれた日本の小説を分析する。同時に、その時々で社会で支配的だったエイズにまつわる言説をたどる。それによって、エイズが世界で流行しはじめた1980年代以降、日本の人々がエイズをいかにイメージ化してきたかについて考察する。

筆者はアフリカ文学を専門とし、アフリカでエイズをテーマにして書かれた物語について分析してきた。ノンフィクションであるライフストーリーにしろ、フィクションである小説にしろ、物語の要素を持つ作品は、アフリカの人々がエイズにどのような意味を与えているかを教えてくれた。

アフリカの物語を分析する過程で、日本でもエイズをテーマに多くの作品が書かれていることが明らかになった。ノンフィクションでは、日本人のHIV陽性者が書いた体験談、¹陽性者の語りをジャーナリストがまとめた体験談、海外の陽性の著名人の体験談を翻訳したもの、海外で陽性者を支援した日本人の経験談などがある。フィクションでは、権威ある文学賞を受賞した作家による純文学的な小説はもちろん、新書版サイズの大衆的な小説や女子高校生向けのケータイ小説など、²さまざまなタイプのものがある。一見雑多な作品群は、書かれた当時のエイズの言説をイメージで表象していると考えられる。

以下では、エイズが病として公に報告された80年代から、90年代、2000年代、2010年代の4期に分け、それぞれの時代のエイズにまつわる言

説の性質を各種の文献資料で明らかにする。そのうえで、その時々書かれた代表的な小説を分析し、人々のエイズ認識をイメージの次元で探っていく。2010年代の小説については、今後書かれるだろう作品を展望する。

なお、作品と出来事を時系列順で表にし、論文末尾に載せている。適宜参照されたい。

第1節 排除と管理の80年代 ——「第1次エイズパニック」から 「エイズ予防法」へ

(1) 世界の状況

世界的に見て、エイズの歴史は、81年4月に「アメリカ疾病管理予防センター」(CDC: Centers for Disease Control and Prevention)が、アメリカのゲイ男性のあいだで流行している「奇病」を報告したのに始まる。³現在では、それ以前の50年代からエイズとみられる病がアフリカのコンゴ河上流の村々で発現していたことが分かっているが、世界的な大流行は、このCDC報告を端緒とするのが通例である。

CDCによる報告以降「奇病」の解明が進み、82年には「エイズ」(AIDS)すなわち「後天性免疫不全症候群」(Acquired Immunodeficiency Syndrome)と命名され、83年には原因となるウイルスである「HIV」すなわち「ヒト免疫不全ウイルス」(Human Immunodeficiency Virus)が特定された。

80年代という流行初期の段階では、病の仕組みも十分に明らかでなく、陽性者の人権よりも社会防衛を優先する対策が主流であった。

たとえばアフリカでは、おおむね80年代半ばに各国が「国家エイズ制圧プログラム」(NACP: National AIDS Control Programme)を策定し、保健省が主導して感染の動向を把握し、陽性者の行動を管理し、病を囲い込むことに力を注いだ。それを大統領直轄の「国家エイズ評議会」(NAC:

1 HIVはエイズを引き起こすウイルスである。HIVに感染してもすぐには症状が出ないが、徐々に免疫力が低下し、10年程度で肺炎、脳炎、癌などを発症する。これがエイズと呼ばれる状態である。本論では、症状の有無にかかわらず、ウイルスに感染している人を陽性者と呼ぶ。これは「positive people」の訳語で、HIV陽性^{ポジティブ}であっても前向き^{ポジティブ}に生きることを含意する。

2 ケータイ小説とは、携帯電話用の無料サイトに書き手が掲載する小説である。詳しくは第6節(3)参照。

3 エイズの歴史については、グルメク参照。とくにアフリカのエイズの歴史については、Iliffe(イリフエ)参照。

National AIDS Council) に改編し、若者の性教育や陽性者の支援を含む包括的な対策を省庁を横断して実施するようになったのは、90年代になってからだ。⁴

日本も例外ではなく、80年代は次に述べるように、陽性者を社会から排除し、感染が広まらないよう監視する対策が取られた。

(2) 日本の状況

——「第1次エイズパニック」以前

80年代の日本におけるエイズの言説は、「第1次エイズパニック」以前と以降に分けられる。「第1次エイズパニック」とは、86年末から87年初頭にかけて国内での感染事例が次々とセンセーショナルに報道され、感染を恐れた人々がヒステリックに過剰反応したという社会現象である。それ以前の81年から86年にかけては、エイズは、ゲイを中心とするアメリカの特定のグループにみられる病、つまり、いずれはこちらに飛び火するかもしれないが、今のところは対岸の火事にとどまっている他人事として、日本では認識されていた。

エイズとゲイの関係を研究する新ヶ江章友は、「第1次エイズパニック」以前の言説について分析するなかで、日本のエイズ報道のごく初期の例として『朝日新聞』の81年7月5日の報道を挙げている。そこでは、アメリカでのエイズ流行が「ホモ愛好家に凶報」として報じられた。その後2年間は報道が下火になったものの、83年春からふたたび増加し、「乱交的なセックスを行うアメリカのゲイの病」としてエイズが前景化された。⁵だが、アメリカのゲイのスクランダラスなイメージとは対照的に、エイズ報道において日本のゲイは曖昧なイメージしか与えられず、感染源として前景化されることはなかった。メディアではいわ

ゆる「おかま」、つまり女のような男としてのゲイばかりが登場し、アメリカの「乱交してエイズを広めるゲイ」とは切り離されていたと、新ヶ江は指摘する(53-65)。

一方、宗像恒次らは、代表的なメディアとしてNHKのニュースをとりあげ、83年に最初の報道があったとする。このときはアメリカの「4つのH」、すなわち、ホモセクシュアル、ヘロイン常習者、ヘモフェリアック(血友病患者)、ハイチ移民者に多発する謎の病気として報道された。84年以降は毎年数回だが報道され、アメリカのゲイに加え、アメリカの血友病の感染児が取り上げられたという(宗像／森田／藤澤 20-21)。

では、このころの日本の「エイズ患者」は、実際のところどれだったのか。

日本の「エイズ患者」は、公式には厚生省の会議で認定されてきた。すなわち、83年に設立した「AIDSの実態把握に関する研究班」、84年からは「AIDS調査検討委員会」、86年からは「エイズ・サーベイランス委員会」という場で、厚生省はエイズ患者を認定し感染の動向を把握していたのである。⁶

厚生省の会議で日本人の第一号患者として認定されたのは、アメリカ在住で日本に一時帰国したゲイだった。これは85年3月のことだったが、じつはその2年前の83年に、厚生省は帝京大の血友病患者を疑い深い例として把握していながらも、エイズ患者として認定しなかった。このいわゆる「帝京大症例」は、その後85年5月にエイズ患者として追加的に認定された。このことは、厚生省が血友病患者の感染を意図的に隠ぺいした証拠として、のちに厳しく批判された。⁷

いずれにしろ、「第1次エイズパニック」前の80年代前半の日本においては、エイズはアメリカのゲイあるいは血友病患者という限られた人の病気だったと言えよう。

4 牧野／稲場は、アフリカの主要国のエイズ対策について簡潔にまとめている。

5 広瀬の見方も同様で、81年7月5日に朝刊各紙のごく簡単に報道した後は報道が途絶え、83年半ばから報道が増したとする。ただし広瀬は、乱交するアメリカのゲイというイメージについては指摘していない(86-89)。

6 塩川は、最初はメンバーとして、のちにはリーダーとしてこれらの会議に参加し、検討の経緯を内部の視点で『私の「日本エイズ史」』に記している。

(3) 「第1次エイズパニック」

しかし86年末から87年初頭にかけて、ごく一般的な人々が感染の危機を感じるような事例があいついで報道され、「第1次エイズパニック」が起きる。⁸

まず86年11月、長野県松本市でダンサーやホステスとして働いていたフィリピン人の女性が、HIVに感染していたと報道された。この女性は、来日前はマニラでセックスワーカーをしていたとされ、報道があった時にはすでにフィリピンに帰国していた (Miller 19-20)。

つぎに87年1月、神戸に住む29歳の日本人の女性がエイズで死亡したと報道された。彼女が外国人を含む100人以上の男性と性交渉を行っていたこと、HIVに感染したギリシャ人の船員と数年間同棲していたことなどが報じられた (Miller 24-25)。この時の記者会見で、「エイズ・サーベイランス委員会」委員長であった塩川優一は「今やエイズ元年であり、「健全な生活をしていればHIVに感染することはない」ものの、「身に覚えのある人は注意」するよう述べた (塩川 136)。

さらに87年2月、高知に住む妊婦がHIVに感染しており、出産予定であると報道された。この女性は以前、血友病の患者と交際していたとされた。医者に反対されながらの出産だったが、乳児はHIV感染を免れたという (Miller 29-30)。

各事例では、これまでのようなゲイや血友病患者でなく、女が感染を広める存在として提示されている (Miller 30-31)。ここで注目したいのは、主役となった女たちの性質の変遷である。

最初の松本の件では、感染を社会に広めているのは外国人のセックスワーカーだった。それが神戸の件では日本人のセックスワーカーとなり

——この2人がじっさいにセックスワークをしていたかどうかは明瞭でないが、不特定多数と性行為を行っていたように提示されたのは確かである——、さらに高知の件では日本人の妻であり母となった。

こうしてエイズは、「危険な女たち」により一歩ずつ日本の家庭に近づいていき、そこに侵入していくものとして提示された。この図式において、感染源は「外国人の船員」や「日本人の血友病患者」であるが、感染を広め社会を危うくしていくのは、彼らと性行為を持った女たちとされているのである。

以上の三つの事件がつぎつぎと派手に報道され、エイズにたいする恐怖が世間を席卷した。これが「第1次エイズパニック」である。じっさい宗像らによれば、NHKニュースだけでもエイズについて87年に149回、88年に100回もの報道があった (宗像／森田／藤澤 21)。さらに広瀬弘忠は、87年1月から2か月間、日米の主要な新聞報道を比較し、患者数がアメリカの0.1%程度だった日本で、患者の人権問題を報道する頻度が低く、政治や行政の対応についての報道は頻度が高かったことを明らかにしている。人々のヒステリックな反応を鎮めようと政治と行政が過剰反応をしていたこと、それが社会防衛のためなら人権無視も許容する「安易で短絡的な戸締り、取り締まり論」(287)の反映であることを、広瀬は指摘している。当然ながら検査件数もうなぎのぼりで、「身に覚えのある人」が保健所に押し掛けた。神戸市の保健所に寄せられた相談事例では、ある男性が保健所で採血したことが妻に知られ、男性の母親が「妻や世間に申し訳ない」と自殺未遂を犯したというものまであった (井上 41)。

(4) 「エイズ予防法」

このような異常ともいえる状況のなかで、87年3月に「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律」いわゆる「エイズ予防法」案が国会に提出される。血友病患者やゲイが法案の差別性を訴えるが、⁹結局88年12月に法案が成立。やがてパニックは沈静化し、NHKのニュース報道も89年には47回、91年には55回と急減した (宗像／森田／

7 血友病患者の薬害エイズについては多くの論考がある。もっとも網羅的なものは東京 HIV 訴訟弁護団がまとめた全5巻の記録である。「帝京大症例」の認定については、菊池あるいはNHK取材班／桜井による論考も詳しい。また、保坂による報告は簡潔にまとめられている。

8 Miller (ミラー) は博士論文で日本の「第1次エイズパニック」をジェンダー視点から分析している。

藤澤 21)。

「エイズ予防法」のどこが差別的だったのだろうか。¹⁰

予防法によれば、医師は、ある人物の感染を特定した場合、その人の年齢、性別、感染原因を、本人が居住する都道府県知事に報告する義務がある(第3条第1項)。これは、厚生省が感染動向を把握するための基礎情報となる。

しかしそれにとどまらず、医師は、その人物が「多数の者にエイズの病原体を感染させる恐れがあると認めるとき」は、住所氏名を都道府県知事に報告する義務がある(第4条第1項)。さらに、その人物に「エイズの病原体を感染させたと認められる者が更に多数の者にエイズの病原体を感染させる恐れがあることを知り得たとき」は、感染源と思われる人物の住所氏名を知事に通報することができる(同上)。

一方、通報を受けた知事の方は、感染源と思われる人物に検査を受けるよう命じることができ(第4条第2項)、感染が判明した時は「伝染の防止に関し必要な指示」を行うことができる(第4条第3項)。

中川重徳や広瀬(177-80)の指摘を待つまでもなく、「恐れがある」というあいまいな判断で、医師が目の前の陽性者のみならず、その感染源と思われる人物に関する情報までを通報できるとし、通報を受けた知事の方は、その人物の生活に踏み込むことが可能となっているのである。

つまり「エイズ予防法」は、2次感染を防ぐという目的で陽性者のプライバシーを侵し、彼らを犯罪者扱いするものであり、その結果、検査から人々の足を遠のかせ、エイズへの恐怖を増し、かえってエイズが蔓延する事態を引き起こすものだった。じっさい、法案が国会に上梓されて以来、病院のHIV検査予約がつつぎとキャンセルされていることを、エイズ関連の診療の中心だった東

京都立駒込病院の根岸昌功医師が、法案の審議の最中に訴えていた(菊池 85-88)。

第2節 島田雅彦『未確認尾行物体』(1987年)

(1) 小説のあらまし

このような「エイズパニック」と「エイズ予防法」の議論のさなかに発表されたのが、島田雅彦による『未確認尾行物体』である。エリート医師の笹川健一が、性転換したゲイでHIV陽性のルチアーノに付きまといわれ、HIVに感染するのを、コミカルに描く。表題作となっている中篇一篇と、その後日談の短篇三篇「ビデオ・アイコン」、「エイズ友の会」、「ウイルスの奇蹟」から成り、まとめて一つの長篇として読むことも可能である。本論でもそのように扱う。それぞれ『文学界』86年11月号、『海燕』87年1月号、『新潮』87年1月号、『文学界』87年6月号に発表され、87年10月に単行本にまとめられ文藝春秋から発行された。掲載誌はいずれも純文学の文芸誌である。

島田は83年のデビュー以来「常に現代文学の最前線で活動」(山本亮介)してきた。「イロニーを含んだ軽い文体」(「島田」)で知られ、文学だけでなく、オペラの演出や映画出演もこなし、各種メディアにもしばしば登場する。61年に東京で生まれ、神奈川県川崎市で育った。84年の野間文芸新人賞(『夢遊王国のための音楽』)、92年の泉鏡花文学賞(『彼岸先生』)、06年の伊藤整文学賞(『退廃姉妹』)、08年の芸術選奨文部科学大臣賞(『カオスの娘』)といった受賞歴がある。現在、法政大学教授で、文芸家協会理事も務めている。¹¹

『未確認尾行物体』の舞台は94年から95年に設定されている。これは、作品の発表時から8年後

9 「エイズ予防法」の差別性について、菊池は血友病患者の立場から、新ヶ江はゲイの立場から、それぞれまとめている。

10 条文は、「エイズ予防財団」が運営するサイト『エイズ予防情報ネット』に掲載されたものを参照した。

11 本論で島田雅彦、瀬戸内寂聴、帯木蓬生の略歴を書くにあたって、浅井／佐藤編『日本現代小説大事典』の増補縮刷版および日外アソシエーツ編『新訂作家・小説家人名事典』をおもに参照した。近年の受賞歴などは、著者の近刊に掲載された略歴などを参照した。

の未来にあたる。主人公の笹川はG大学附属病院に勤める33歳の産婦人科医である。東京都品川区出身で、学習院の初等科から高等科までをすべて首席で卒業し、皇太子のご学友でもある。母は皇太子妃の主治医。父は旧華族の当主で、食品会社を経営。元バイオリニストの妻と小学校1年生の息子とともに、6LDKのマンションに暮らしている。

94年7月、ルチアーノと称する「おかま」は、皇太子にサインをねだろうとオペラに行き、そこでご学友の笹川に出会う。彼らのような上流階級に憧れて、ルチアーノは笹川を尾行し、レストランで隣に座って同じものを食べ、夫人と同じ香水とワンピースを身につけるようになる。笹川への一方的な恋情を募らせて、夫妻それぞれの浮気調査をみずから行い、調査結果を本人たちに送りつけて離婚に追い込む。さらには自分の血液を歯に塗って笹川に噛みつき、HIVに感染させようとする。あまりのつきまといに業を煮やして殺意を抱く笹川の前で、ルチアーノはみずから湖に身を投げて自殺する（以上「未確認尾行物体」）。

ルチアーノの自殺後、本人が生前に制作したビデオ・レターが笹川に届く。ビデオ・レターでの告白によれば、ルチアーノを感染させたのは混血の少年であり、彼は感染して自暴自棄になり乱交していたのだという（以上「ビデオ・アイコン」）。

そして95年3月、笹川はみずから検査を行い、HIV感染を確認する。そして「エイズ友の会」に加入する。「エイズ友の会」の会長は著名な免疫学者だが、感染するために患者とあえて性交したという変わり者である。会長は、HIVは「人間か[が]人間らしくするための免疫をメチャクチャにしてしまう」（島田151）のであり、「自分と他人と区別か[が]つかなくなってしまう」（151）のだと笹川に語る。¹²笹川は会長や会員との交流をとおして、自他の境界が揺らぐのを感じ、新たな自己意識へと近づいていく（以上「エイズ友の会」）。

ある日まどろみのなか、妙に意識が覚醒して、

笹川は「自分の肉体とそれを包むものが一体になって爆発する感覚」（204）を得る。この感覚を小説は次のように説明する。

彼[笹川]は、この世の一切の束縛から解放され、今や殆ど無味無臭の、電子顕微鏡でかろうじてとらえられるほどの大きさの粒子に分解されたのだ。かつて笹川賢一という人間の秩序を形作っていた粒子は自由に飛び回り、植物の根に吸収されたり、動物の口に入ったり、ジェット機のエンジンに吸い込まれたりするだろう。（204）

世界との一体感を感じる至福状態のなか、笹川は「自分の肉体をウイルスが住むアパートとして提供しながら、土に帰る時を待つ人々であふれる」（205）アフリカに行つて死を迎えることを決意する。小説の最後に読者は、笹川はルチアーノから感染したのではなく、じつは浮気相手から感染した妻から感染したという事実を、「エイズ友の会」会長と妻の会話をとおして知らされる（以上「ウイルスの奇蹟」）。

(2) 小説の評価

物語中、おもな登場人物で感染しているのは、女の姿に性転換したゲイ、そして浮気をする上流階級の夫婦である。脇役では、乱交する混血の少年、感染した母から生まれた乳児、陽性者とあえて性交した医者が感染している。

本書の見るべき点は、87年というきわめて早期に、エイズを物語化するという困難な課題に挑戦し、現代的な回答をそれなりの水準で提示したという点にある。物語において、免疫を破壊するHIVは、自他の境界を攪乱する内なる異物として表象される。敷居の高い上流階級に閉じこもっていた笹川は、HIVに感染した性転換者のルチアーノに付きまといられた結果、社交クラブから排除され、離婚もされる。笹川にとっては不条理でしかないが、HIVにより免疫が破壊され、自他の境界を守れないし守ろうとも思わないルチアーノは、憧れの対象である上流階級にとりついてそれと一体化しようとするのに何の遠慮もない。そしてル

12 会長は鼻づまりのために発音が不明瞭という設定になっている。

チアーノの死後、笹川も、ルチアーノのビデオ・レターを視聴したり、ルチアーノが所属していた「エイズ友の会」の会長と語り合ったりすることで、上の引用のように新たな自己意識を獲得する。最終的には、高級社交クラブのなかでもHIVが蔓延していたことが明らかになり、排他的に見える境界であってもHIVには横断可能であることが示される。文庫本の解説として、現代思想家の浅田彰が「AIDSの／AIDSによる脱構築」を寄せており、理解を助ける。¹³

したがって、物語においてウイルスは肯定的なイメージを与えられている。タイトルである「未確認尾行物体」とはルチアーノのことで、都市を徘徊して人々を感染させ、境界を破壊し、逆説的に人々を解放に導く正体不明のウイルスを象徴する。

この姿勢の先進性は、同じ87年に発表された

13 たとえば浅田による以下のコメントを参照。「AIDSとは、根本的には免疫のメカニズムにほかならない排除と特権化のメカニズムを無効にし、それによって形成され維持されるはずだったアイデンティティ——『正常な社会』のそれであれ『パリア』のそれであれ——を根底から解体してしまうような何ものかなのである」(212)。あるいは、「AIDSは、確固たる輪郭を持った主体というフィクションを掘り崩し、そのような輪郭は、さまざまな物質や生物を含む流れのなかに、免疫系の効果として、震える線で描かれているものでしかないことを、裏側から照らし出してしまうのだ」(216)。また、瀬戸内も交えた94年のシンポジウムでの浅田の発言「たしかにウイルスは外からくるけれど、それはレトロウイルスであり、感染者のDNAの中に潜り込んでしまうと、『自己』なのか『非自己』なのかわからなくなってしまう。しかも、それが活性化されると、免疫機構が崩れ、内も外もなし崩しになって死んでしまう。そういう意味では、外からの攻撃を受けて内なるアイデンティティが鮮烈にきらめくというのとは全く逆で、アイデンティティ自体が雲散霧消していくというベクトルを持った不思議な病気なんです」(浅田／瀬戸内／中沢 187) は、本論で引用した終末期の笹川の自己イメージを想起させる。

大衆的な小説と比較すると明らかである。和久峻三による『エイズ街の連続殺人——長編法廷サスペンス』は、新書版で活字2段組みの大衆的な小説である。87年に『小説現代』の臨時増刊号に掲載された。物語では、エイズを発病した男が逆恨みして、これまで関係を持った女たち——元セックスワーカー、ハイチ人の父を持つグラビア・モデル、夫がタイに駐在中にアルバイトで売春する人妻——を次々とレイプして殺す。物語は犯人探しと裁判を中心に展開し、エイズパニックを理知的に回収しようとする。しかしそれとは裏腹に、エイズに対する恐怖とそれをコントロールしようとする欲望が、物語に通底している。

それにたいし『未確認尾行物体』では、覇権的な言説に見られる社会防衛の姿勢を疑問に付し、感染の恐怖を転覆的な解放として解釈しなおす。そしてそれを、性や階級を越境して生きる人々にイメージ化して表現するのである。

しかし『未確認尾行物体』は限界も抱えている。87年という早期に書かれているがゆえに、執筆にあたって参照できるような陽性者本人の語りほとんど出版されておらず、そのため感染の過剰な観念化が行われているということだ。たしかに、島田に代表される前衛的な現代作家は、「ある登場人物が様々な経験をしながら成長を遂げる」といった近代的なドラマに批判的である。それを差し引いて考えても、2010年を過ぎた現在、HIVとともに生きる人々の多様な物語を知っている読者であれば、本書の軽やかでコミカルなエイズの扱い方に違和感を覚えることだろう。本書の楽天的な軽妙は、重い現実には縛られていないからこそできた虚構の跳躍であり、重い現実が明らかになっている今は、上滑りな印象を与える。そこには、お決まりの「感染を乗り越えるサバイバーの語り」を脱構築するほどの力は感じられない。

一方、登場人物に注目してみると、中心的な陽性者であるルチアーノが、女に性転換したゲイであるという点は、当時の日本のエイズ表象を考えると興味深い。新ヶ江の論を引いて考察したように、「第1次エイズパニック」以前に支配的だった陽性者像は「乱交するアメリカのゲイ」であり、それが「エイズパニック」により「感染を

社会に広める女」に変化した。一見女だがじつは性転換したゲイというルチアーノは、当時の陽性者イメージを複層的に表象する。

その一方で、血友病患者はまったく登場しない。なぜなら当時、血友病者の感染はまだ社会に広く知られていなかったからだ。もちろん、当事者や専門家のあいだでは問題意識はすでにあった。しかし薬害エイズ訴訟が始まったのは89年であり、しかもほとんどが匿名の裁判だった。87年に出版された本作品に血友病患者が登場しないのも無理はない。

第3節 共生とロマン化の90年代 ——「第2次エイズパニック」から 「エイズ予防指針」へ

(1) 「第2次エイズパニック」以前

86年から87年に社会を席卷した「第1次エイズパニック」は、80年代の終わりには収束し、その後エイズに対する人々の関心は弱まった。「エイズにかかっているのは特別な人で、人権を多少無視してでも彼らを法的にコントロールし、我々一般人に広まらないようにすべきだ」という人々の考えが実現したことで、パニックが沈静化したのだらうと、前出の駒込病院の根岸医師も述べている（根岸17-18）。87年3月のエイズ予防法案提出から92年7月までの無関心の時期を、宗像らは「魔の5年間」と呼び（宗像／森田／藤澤 22, 29, 109-10）、世論を喚起して有効な方策を取らなかったことを悔やんでいる。

とはいえ、この時期から少しずつではあるが、おもに海外の事例がノンフィクションの物語という形で紹介され始める。88年に翻訳出版されたジュリエットの『なぜ 私が——エイズ患者の告白』は、フランスの美貌のジャーナリストが、奔放な性生活を送るなか感染する自伝で、匿名で書かれた。89年にはグスタフ・ヨンソンとブリット・ヨンソンによる『感染——エイズ!! 感染した医師とその妻の記録』が翻訳出版された。これは、スウェーデンの精神科医が手術時に輸血を受けて感染した経験を、本人とその妻の立場から記すものである。90年に出版された家田荘子の『私を抱

いてそしてキスして——エイズ患者と過ごした一年の壮絶記録』は、家田がアメリカでエイズ患者を支援した経験を記すもので、白人のゲイと異性愛の黒人女性の事例が挙げられている。これらは、「乱交するアメリカのゲイ」以外の感染事例で日本人が共感できそうな話を、まずは海外で探して紹介した試みといえる。

また、薬害エイズ当事者によるライフストーリーはのちに多数出版されることになるが、この時期に最初の1冊が出版されている。赤瀬範保は、89年に薬害エイズ第1次訴訟を起こした原告団のうち、唯一実名を公表した人物である。91年に出版した『あたりまえに生きたい』では、患者の自助活動や薬害問題の啓発活動を行うなかでの想いをストレートに語った。

とはいえ、社会全体としては関心が低調であったことは確かである。大江健三郎は90年に小説『治療棟——近未来SF』を発表しているが、これは、核戦争が起きエイズが蔓延する近未来社会を舞台にしたSF作品である。当時の認識は、「エイズはいつでも自分の問題になりうるとはいえ、今のところは差し迫った問題ではない」といったところだったのだらう。エイズはいまだ、近くて遠いものだった。

(2) 「第2次エイズパニック」

しかし92年、それまでの無関心から一転して、「第2次エイズパニック」が起きる。

きっかけは、92年7月に2夜連続でNHKスペシャル『エイズ危機』が放映されたことだ。¹⁴番組は、91年11月から12月にかけて宗像らが実施した調査にもとづいて、¹⁵異性愛行為での感染が増加しつつあること、そしてこのままだと感染爆発が起きることを警告した（宗像／森田／藤澤 23）。さらに10月から12月にかけて東京都が著名人を起

14 現在、番組自体を見ることはできないが、その内容を書籍『NHK スペシャル エイズ危機』（NHK取材班）で読むことができる。同書によれば、放送第1回は「日本で感染爆発は起こるか」、第2回は「日本は感染爆発を防げるか」というサブタイトルで放映された。

用して「ストップ・エイズ」の啓発コマーシャルを放映。『読売新聞』によると2か月で226回放映され、エイズ問題が社会で顕在化した(「“ Condom CM” 好感度68%)。また、宗像らによれば、92年のNHKによるエイズ関連のニュース報道は237回、93年は221回に及び、「第1次エイズパニック」時の2倍の規模となっている(宗像／森田／藤澤 23)。

(3) 当事者が語る

一方、多様な当事者がみずからの声で感染を語り、エイズが人間の顔を持ち始めたのも、この時期のことだ。

まずは92年10月、ゲイである平田豊が、性行為で感染したエイズ患者としてはじめて記者会見を行った。それまで人前に出ていたのは、薬害エイズ訴訟の原告である血友病患者数人だけであった。そしてこの会見の後、日本人ゲイの陽性者のライフストーリーが複数出版された(飯塚;大石;平田;山下/児玉)。

同時に、ごく一般的な人々の体験談も匿名ではあるが発表された。たとえば、ジャーナリストの志村岳がまとめた『企業戦士エイズと闘う』は、ある会社員が出張先のタイで買春して感染し、闘病する様を追う。志村はさらに、会社員だけでなく主婦や学生など、ごく一般的な人たちが感染するというエピソードを92年11月から93年8月まで『女性セブン』に連載し、『止まらない時計——エイズに感染した日本人の妻、夫、恋人たち』として刊行した。志村はまとめの第7章「エイズが発症爆発する日」で、感染爆発から発症爆発の段階に入ったと現状を総括している。

また、アメリカを中心として海外の事例も翻訳出版された。もっとも有名なのは、91年に感染を公表したバスケットボール選手、マジック・ジョンソンのライフストーリーだろう(ジョンソン;ジョンソン/ノヴァク)。モデルでジュエリーデ

ザイナーだったティナ・チャウも、異性愛関係をつうじて感染した(伊藤)。このように異性愛の著名人の事例を紹介することで、性行為をしていればだれでも感染しうることが強調された。一方、フランスのバルバラ・サムソンは著名人でなくありふれた元非行少女で、10代の冒険が命取りになることを自伝をつうじて警告した(サムソン)。

一方、輸血による感染の悲劇も紹介された。ハリウッド俳優の妻であるエリザベス・グレイザーは、輸血により感染し、子ども2人にも母子感染させた苦しみを書いた(グレイザー)。同じく輸血で感染したジョナサン少年の写真絵本が翻訳出版されたのもこの頃で(スウェイン『ぼくはジョナサン』)、彼は数回来日し(スウェイン『ジョナサンの』)、成人後の様子も後に写真絵本化された(サンチェス『父親になった』)。

このようにさまざまなライフストーリーが発表されることで、一部の人だけに感染の危険があるのでなく、だれでもHIVに感染しうるという理解が広まった。尊厳ある陽性者がみずから発言し活動する姿は、エイズのイメージを変え、人々の間に共感的な理解を育むのに役立った。

このように社会でエイズがとらえなおされるなか、94年8月には、エイズ関連では世界最大の国際会議である「国際エイズ会議」の第10回大会が横浜で開催された。そこでは、HIV陽性のゲイ活動家である大石敏寛が開会式で演説し、会場の陽性者に起立を求め、およそ100人が起立して堂々たる存在感を示した(大石 146-63;「“勇氣ある起立”に拍手」)。

(4) 薬害エイズ訴訟

一方、この時期、薬害エイズ訴訟にも進展が見られた。

薬害エイズ訴訟は89年にまずは大阪で、つづいて東京で始まった。「第1次エイズパニック」に怯えて身をひそめていた薬害エイズ被害者は、当初、匿名で提訴に踏み切った。大半が匿名だったため支援活動はなかなか広まらなかったが、裁判が進むにつれ、衝立越しではあったものの被害者が原告として発言し、それがニュースキャスターの櫻井よしこ、漫画家の小林よりのりといっ

15 調査結果は『エイズとセックスレポート/JAPAN——感染爆発のきざし』として書籍化されている(宗像/田島)。また、宗像/森田/藤澤は、調査結果を簡便にまとめており読みやすい。

た著名人によってとりあげられることで、社会での存在感を高めていった（東京HIV訴訟弁護団、第2巻、23-37および155-57）。

そしてついに95年3月、19歳だった川田龍平が若者代表として実名公表する。これ以降、支援活動には一般の若者が多く参加するようになって社会的な広がりを見せ、95年7月には「あやまってよ'95人間の鎖」のスローガンのもと、厚生省前に3500人が集結し、早期解決、賠償、謝罪、真相究明などを求めた（東京HIV訴訟弁護団、第2巻、37-64）。さらに96年2月の厳冬期、厚生省前で原告自身が命がけの座り込みを行うなか、菅厚生大臣は原告らと面会し、国の加害責任を認めて謝罪した。原告らはつづいて製薬会社からも謝罪を引き出し、3月の和解へとこぎつけた（東京HIV訴訟弁護団、第2巻、193-214）。

血友病患者のライフストーリーは、91年に赤瀬が発表して以来、この時期に多くの作品が発表された。¹⁶ 川田にかんしては多くのノンフィクションが書かれているが、川田自身による文章としては、たとえば『龍平の現在』や『日本に生きるということ』がある。前者は、川田の日記、集会や会見での発言、エッセイをまとめて96年に出版したもので、実名公表当時の川田の肉声を記録している。後者は、川田がのちに国会議員になってから書いたライフストーリーである。

(5) 「エイズ予防指針」

また、99年には、悪名高い「エイズ予防法」がようやく廃止され、かわって「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」いわゆる「新感染症法」が施行され、とくにエイズに関しては、「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」いわゆる「エイズ予防指針」が告示された。

『産経新聞』の記者として、そしてのちには「エイズ予防財団」理事としても、国内外のエイズの運動と施策の現場に身を置いてきた宮田一雄は、『絵に描いた餅』からの離脱へ——改正エイズ予

防指針の背景と課題』で、「エイズ防止法」から「エイズ予防指針」への流れを簡潔にまとめている。

宮田によれば、「新感染症法」はそれまでの予防重視の法律とは違って、予防と同時に患者の看護にも重点を置くものだった。かつての社会防衛的な法律が、ハンセン病やエイズといった感染症に対し、人々の恐怖や不安をあおって社会的な混乱を招いてしまったという反省に立ち、「重要なパラダイムシフトがなされた」（宮田『絵に描いた』28）のである。「エイズ予防指針」も「予防」を謳っているものの、陽性者が「安心して治療を受けられるような社会環境」（29）が整えられてはじめて、病がコントロールでき予防が進むという認識をもとに、看護や支援にも言及している。

つまり92年の「第2次エイズパニック」から94年の「国際エイズ会議横浜大会」を経て99年の「エイズ予防指針」にいたる時期には、HIVと生きる経験について陽性者みずからが人々の前で証言し、だれでもHIVに感染しようという認識が広まり、陽性者との共生がうたわれたのである。

(6) 『神様、もう少しだけ』とロマン化

しかし佐藤和久が指摘するように、これを別の角度から批判的にとらえるとすれば、かつてのエイズに対する恐怖からエイズに対するロマン化へと極端に針が振れたということもできる。

たとえば98年に放映された連続ドラマ『神様、もう少しだけ』では、平凡な女子高校生が、憧れのミュージシャンのコンサート・チケット代のために、1回だけ「援助交際」つまり金銭と引き換えに年上の男と性交渉を持ち、HIVに感染する。その後ミュージシャンとの恋がかない、感染の危険を冒して彼と性行為をし、その結果身ごもった子を命がけで出産する。そして静かに息を引き取る。

さまざまな障害を乗り越えて愛を貫く二人の姿はドラマチックに提示される。とくにラストシーンで、もはや命尽きたヒロインが純白のウェディングドレスに身を包み、愛する男の胸に抱かれ微笑みを浮かべる姿は、エイズによる死と引き換えに成就した愛を美しく謳いあげる。このロマンスの前では、コンドームなしの性行為の危険性や、

16 代表的なものとしては、石田；石田／小西；川田『龍平の』；草伏；東京 HIV 訴訟原告団；西野；吉松がある。

命の危険を顧みずに出産する無謀について論ずるのは野暮でしかない。

第4節 瀬戸内寂聴『愛死』(1994年)

(1) 小説のあらまし

このような社会状況のなか書かれたのが瀬戸内寂聴の『愛死』である。93年11月4日から94年9月5日まで『読売新聞』朝刊紙上で連載され、94年11月に講談社から単行本として発表された。

瀬戸内は天台宗の尼僧でもある女性作家である。22年に徳島市で生まれた。夫と娘を捨てて恋人のもとに出奔し、さらに別の男性も交えた三角関係を持ったが、その過去は、63年に女流文学賞を受賞した自伝的小説『夏の終り』に詳しい。73年に得度。92年の谷崎潤一郎賞(『花に問え』)、96年の芸術選奨文部大臣賞(『白道』)、01年の野間文芸賞(『場所』)、11年の泉鏡花文学賞(『風景』)など多数の受賞歴がある。源氏物語の現代語訳でも知られ、06年には文化勲章も受賞している。社会運動にも熱心で、近年は反原発運動に力を注いでいる。

『愛死』の主人公の遥子は29歳の独身女性。フリーで雑誌にエッセイやコラムを書いている。あるとき取材旅行中にバイセクシュアルの美青年、亮に出会う。亮自身はHIVに感染していなかったが、エイズの恋人を看取ったばかりだった。遥子は亮と意気投合し、親しい叔母の彰子(後述)も亮に紹介して、親交を深める。

遥子の従妹の舞は高校生で、祐二と付き合っている。祐二は血友病でHIVに感染しており、薬害エイズを告発する運動に携わっている。老舗の呉服屋を営む舞の両親は二人の付き合いに反対し、それに反発して舞はディスコのお立ち台で踊り狂う。遥子は舞を諭し、両親も理解するようになるが、不幸なことに祐二は交通事故で死去する。

遥子の伯父の昌平とその妻彰子は、子どもがいないことも手伝って、両親を早くに亡くした遥子にとっては両親の代わりのような存在である。彰子は堅物の昌平に飽き足らず、婚外関係を重ねたこともあった。そしてそのうちの一人である画家の伶と激しい恋愛をした。しかし伶は突然に姿

を消し、やがて彰子も婚外交渉は止めた。

遥子を通じて亮と知り合ったことをきっかけに、彰子は懸案だったHIV検査を決意し、感染を知る。過去の婚外交渉と検査結果について夫に告白する置き手紙を残して家出し、亮のところに身を寄せ、亮の手厚い看護により快復していく。独り残された昌平はある日脳卒中を起こして意識不明となるが、舞に戻った彰子の看病により快復。夫婦は和解する。

物語の最後、亮は彰子を愛していたことに気づき姿を消す。一方の遥子は、亮を愛していたことに気づく。

(2) 小説の評価

本書の特徴は、エイズにかんするさまざまな話題が肯定的に盛り込まれているという点だ。登場人物の面でいうと、ゲイあるいはバイセクシュアル、血友病患者、婚外交渉をする妻など、陽性者の典型例とされる人々を内側から描くことで、陽性者にたいする共感を読者に喚起する。登場しない典型例は女性セックスワーカーぐらいだが、それは、セックスワーカーでない女でも十分に感染の可能性があると示唆するためだろう。また、実在のゲイ活動家である平田豊を強く思わせる人物も登場し、命を縮めながら懸命に活動する様が描写される。彼らはみな、ときに過ちを犯しながらも感染をきっかけにみずからの性に向き合う人物として、肯定的に描かれている。

小説が新聞に連載されている最中に、国際エイズ会議の第10回大会が横浜で開催され、紙面上でも多くの報道があったはずで、小説中のさまざまなエピソードはリアルに響いたに違いない。

また本書は、エイズに関する基礎知識——感染の仕組みに始まって、エイズ患者の看病の仕方、血友病患者が告発する薬害エイズ問題のポイントなど——について、医者や活動家といった登場人物に語らせることで、読者を啓発する役目も果たしている。

このように陽性者を丁寧かつ肯定的に描くことで、本書はたしかに、エイズに対する偏見と恐怖を減じ、陽性者に対する共感を育むのに成功した

と思われる。しかし同時に、活動家を聖人化しエイズをロマン化することで、結果的にエイズを非現実化するという側面があったのは否めない。

まず一つ目の活動家の聖人化という問題について、血友病を患う祐二を例にとって考えてみよう。祐二は薬害エイズの運動に携わる好青年で、一度は自殺も考えたが立ち直り、小樽のガラス工房で作品を制作しながら前向きに生きている。しかしある日、車に轢かれそうになった老人を助けて重傷を負う。息絶え絶えになりながら、自分はエイズであること、したがって流血する自分を老人から離さねばならないことを周囲に警告したため、周囲は祐二を介抱するのに躊躇し、応急処置の不足で祐二は死去する。

自分の命を犠牲にして他者の命を救う高潔さの裏には、血友病患者の両面的な立場がある。血友病患者は、血液製剤を通じてHIVに感染させられた被害者であるが、同時に他者を2次感染させる加害者ともなり得る。それゆえに差別されていたと言えるが、祐二はみずからの命を落としてまで、他者に感染させることを避けたのである。今際の祐二の態度は立派だが、祐二の事故の場面は、祐二の伯母が舞に宛てた手紙のなかで、しかも他人から伝え聞いた話として、記述される。したがって読者は、祐二の最期から幾重にも隔てられており、彼の高潔ぶりはいっそう非現実的に響く。

また、ゲイのエイズ活動家である平野も、その聖人ぶりが際立っている。平野を取材した遥子は、みずからも死期が近いのに陽性者を励ます平野のことを「神さまか仏さまみたい」（瀬戸内上114）と評する。テレビ番組で平野を見たという彰子は、彼の目は「哀しいほど澄んで」（119）いたと評し、「あの人の頭の後ろに後光がさしているようで、思わず私合掌してた…（中略）…あの人はエイズという悪魔にとりつかれて、そのおかげで、何かしら神聖なものになってしまった」（120）と語る。

また、遥子が別の機会にインタビューしたときには、平野はすでに視力を失っている。そして自分の人生について、「生きるのがほんとに辛い日もあるけど、ぼくがまだ生きているってことだけで、自分だってがんばろうと思ってくれる感染者

もいるのよね。そんな声聞くと、ああそうか、人のために生きればいいんだなって自分で思っちゃう。そうするとまた元気が出てくるんだ。でもね、ほんとにもう、生きるのがしんどい時がある」（下40）と述べる。そして、目が見えるときは「来年はこの桜の満開は見られるかな」（40）と思ったが、目が見えなくなった今は「見えてる時見た風景が、光り輝いて記憶の中で見えてくる」（40）と語る。インタビューに同行したカメラマンは、平野の顔を「清らか」（43）で「セントな顔」（43）と評する。

平野のモデルとなった活動家の平田豊もまた、聖人として見られていたが、そのことに違和感を覚えていた。平田は93年12月に自伝『ぼくのエイズ宣言——あと少し生きてみたい』を出版し、94年5月に死去。活動仲間だった山下と児玉が彼の語りをまとめ、同年8月に『それじゃあグッドバイ——平田豊・最後のメッセージ』として出版した。前者は彼の闘病が中心になっているが、後者は「常識はずれでメチャクチャな半生」（山下／児玉4）について赤裸々に伝えている。暴走族や竹の子族に加わったり、ゲイバーで売春をしたり、年上のゲイの愛人をしたり、パチンコ店で働いたり、エイズを発症するまで平田が裏社会で歩んだ破天荒な人生が語られる。本書をまとめた著者らが「はじめに」で述べるように、「エイズと勇敢に闘った平田さん」（4）の「ヒューマニスティックな人生」（4）として自分の複雑な生き様がまとめられてしまうことにたいする違和感が、平田に彼の「メチャクチャな半生」（4）を語らせた。『愛死』の連載は、平田のライフストーリー2冊の出版と時期が重なるが、平田が2冊目で遺した「聖人化してくれるな」という「最後のメッセージ」は十分に聞き届けられなかったようだ。

一方、『愛死』の二つ目の問題であるエイズのロマン化は、『愛死』の登場人物自身が唱道することすらある。遥子が亮のバーに彰子を連れて行ったときに、客とエイズについて議論をするが、そこで「愛をつらぬくためならエイズで死んでも本望」と言わんばかりの主張がされるのである。

彰子が「もし好きな相手がエイズキャリア[HIV陽性者]だとわかった時、コンドームつけますか」

(瀬戸内 上 127) と皆に尋ねると、バーテンダーをしていた亮は否認し、「ほんとの愛は一緒に死ぬことが理想でしょう。昔の恋人は肺結核の相手の血を吸い取ったっていうじゃないですか」(127) と説明する。読者は亮がエイズの恋人を看取ったことを知らされているため、亮の発言は、エイズの現実を熟知する者による正当性の高い発言として受け止められるだろう。

この亮の発言を、ある男性客は「センチメンタル」(127) と批判し、「本当の愛は、愛している相手に感染させまいとする筈だ」(127) と反論する。遙子も男性客に同意し、「自分の身を守るのは自分に対する義務だし、他者に対しては人権よ。自分を愛せない人に他人も愛することなんかできないと思う」(128) と主張する。

しかし彰子は「でも愛って究極は犠牲奉仕でしょう。自分より相手を喜ばすことが優先するんじゃないかな」(128) と応じる。彰子もまた、性愛の喜びと感染の不安を知る者として読者にすでに提示されている。その彰子の発言に遙子は熱くなって、陽性の男がコンドームをつけようとしたら女がそれを投げ捨てたという映画のシーンを例に挙げ、それは「子供っぽいロマンティズム」(129) で「若い恋人どうしが、あの真似したら大変」(129) と激して主張する。長広舌の後、遙子が水割りを読み干して「酔っちゃったのかな、こんなところで演説ぶつなんて不粋ですよ」(129) と謝ると、彰子は「興奮している遙子ちゃんは、なかなかチャーミングだから」(129) と、余裕すら漂わせてとりなす。

この議論で、たしかに男性客や遙子の言い分の方が合理的なのだが、その言葉の選び方や口調は「不粋」(129) であり、教条的にすら響く。それに対し、亮や彰子の言葉は、恋愛の奥義を知った者の知として提示されており、説得力がある。

じっさい、物語の中心を占める彰子の感染は、欲望に忠実に生きた末のものとして、肯定的に美しく描かれている。恋人の侘が彰子の前から姿を消す前、侘は彰子を鹿児島島の最南端にある徳之島に連れて行く。鳥葬が行われるこの島で、侘は漁師の納屋をアトリエにして、骸骨で満たされた洞窟の絵を制作している。以下は、納屋での性行為

の描写である。

彰子は侘の下で飼いならされた従順な家畜になって凌辱の限りを尽くされたり、侘の上で驕慢で残忍な女王になって虐殺の夢魔に取り憑かれたように、美しい奴隷を責めさいなんだ。忘我の死の闇にしっかりとからまりあいながら堕ちてゆく瞬間、彰子は自分たちが白い骸骨になって抱き合っているのを見ていた。(上 100)

侘とは対照的に、彰子の夫は、近頃の性教育に憤慨し、口で性器を愛撫するのに抵抗する昔気質の男として提示されている。彰子と侘の情事は、法的には許されないとしても、たがいの身体を味わい尽くし、たがいの存在の根源に触れる行為として高められて提示されている。そこにはもちろん、散文的なコンドームの入り込む余地はなく、死と一体の究極の性愛がロマンチックに賛美されている。先述したバーでの議論にあるように、「ほんとの愛は一緒に死ぬことが理想」(上 127) であり、相手からHIVに感染しても、生死の境界を超えうるほどの性愛を極めることこそ価値があるとされているのだ。

たしかに、このような性愛の描写を新聞小説で行ったという点で『愛死』はラディカルだった。しかし、エイズのロマン化は問題であり、4年後のドラマ『神さま、もう少しだけ』、さらには2000年代のケータイ小説のリアリティをまったく欠いたエイズの美化にもつながるものだという批判は免れないだろう。

とはいえ『愛死』は、生死を超えるものとして性愛を称賛し、エイズをロマン化して終わるわけではない。性器に重点を置く性交にとどまらず、身体全体でもってお互いを感じることを、性愛をとらえなおすのである。性交を超越するこの性愛は、恋人たちがこの世でエイズとともに愛し生きることを可能にする。

それは、昌平と彰子がたどりついた究極の性愛として提示される。夫の昌平が脳卒中で意識不明と聞いて、出奔中だった彰子は昌平のもとに戻る。病院のベッドで眠る昌平の耳元で話しかけ、自分

の唇が昌平の耳に触れると、看護師の目もはばかりとっさに「耳たぶを口に含んで歯をたて」(下207)る。翌日、昌平が意識を取り戻したと見るや、「昌平の左手を自分の胸にひきよせ」(233)、指がわずかに動く。「その手を自分のブラウスの胸元に突込み、乳房の上に導」(234)く。情念にあふれた描写である。

その後、快復する昌平は彰子にキスをねだり、彰子のほほを伝う涙を指でなぞって口に含む。彰子の掌に「うつってもいい」(250)からと書いて性交を求める。彰子は、「昌平に、自分の肉体が…(中略)…性愛の極致にはどんな反応を示すか、教えてから死にたいと思う」(254)が、「二人は互いの器官を異物抜きで、密着させることは出来なくなっている」(254)と悔い、「生きようとする昌平の肉体に、性欲が命の証のようによみがえってきたというのは、恩寵なのだろうか」(254)と問う。彰子と夫の関係の変化のなかに、性交とは違う次元での身体の交感が予感される。

こうして死に直面して、二人は性、そして生を希求する。二人の今後について「どうやって二人は暮らしていくの」(250)という彰子の問いに対し、昌平は「いっしょに、しねばいい」(251)と掌に書いて答える。それを読んで彰子は、かつての恋人のように、命を落としてでも性交して性愛を極めようとは考えない。彼女は「どんな形にしろ、私たちはもう一度愛し直すことが出来るのよね」(254)と、二人で愛しあいながら天寿を全うしようと決意する。彰子は「自分の余命と、昌平の余命の根比べだと思うと、思いがけない勇気が体の奥から湧き上がってくるのを感じ」(252)る。ここで「一緒に死ぬ」の意味は置き換えられ、「死ぬまで一緒に生きる」ことを意味するようになっている。

結論を言えば、『愛死』は、エイズの多様なあらわれに言及し、啓発しながら共感を育んだという教育的な点で、まず評価できる。それに加えて、エイズによって高められた命がけの性愛というロマンスを描く一方、感染したカップルが互いをいたわり、あたうかぎりの身体の悦びを享受して生きていくという現実的な解決も示して物語を終え

たという力技により、小説としてエイズのドラマ化に成功した点も評価できる。後述するように、この後日本ではエイズに対する関心が低下し、小説も見べき作品は書かれなくなる。今のところ『愛死』が、日本のエイズ小説の到達点と見てよい。¹⁷

第5節 関心が低下した2000年代 ——途上国問題化

2000年代には、国際連合や主要国首脳会議といった国際政治の舞台で、エイズ問題が協議されるようになる。また、大型の資金をエイズ問題に傾注する枠組みが、多国間あるいは二国間で整えられた。その背景には、90年代にエイズの南北格差が広がり、とくにサハラ砂漠以南のアフリカでは、国によっては推定感染率が20%を超えるところも出現したという現実がある。世界は取り組みを強いられたのだ。¹⁸

南北格差がもっとも過酷に表れたのが、治療薬の普及の格差である。1996年、HIVの活動を抑え

17 木村は「エイズの表象」で『未確認尾行物体』、『治療塔』および『愛死』を分析して、3作ともエイズを「テクストの素材として抽象化して組み込むことで物語の活性化を意図し、その結果 HIV・エイズのイメージだけを無責任に再生産したり歪曲させたり」(112)していると批判する。木村は『未確認尾行物体』について「アイデンティティの虚構性・脆弱さを『こちら側』も共有する問題点として提示」(112)したとして部分的に評価する一方で、『愛死』においてはエイズが「一夫一婦的夫婦関係・性関係を再発見し称揚するためのロマンチックなイデオロギー装置と化して」(110)いると批判する。たしかに最終的に、彰子は夫との合法的な性愛に回帰するのだが、二人がたどりついた関係は、性交を中心とする肉体関係を越えた身体関係ともいえるものであり、過小評価すべきではない。木村が『きつと君は泣く』(山本文緒)、『KYOKO』(村上龍)、『SLY』(吉本ばなな)を分析した「エイズのイデオロギー」も参照。

18 アフリカを中心とする世界の取り組みについては、河野および宮田『世界は』を参照。

る治療法が確立し、HIVに感染していても長期生存が可能になった。しかし当初は、この治療が受けられるのは先進国の陽性者と途上国のごく一部の陽性者に限られた。治療薬の知的所有権を製薬会社が主張したため、薬価が高額だったからだ。その後、陽性者の運動により、2000年代の初めには各途上国で治療薬の無料配布が始まった。¹⁹ それでもなかなか埋まらない治療の格差に対処すべく、世界規模での取り組みが模索されたのである。

問題は、エイズが南北問題として国際社会で取り沙汰されるようになり、とくにアフリカがその焦点となるにつれ、日本では当事者意識が低下したことだ。

それを反映して、このころ日本で出版されたエイズ関係のノンフィクションは、タイやアフリカの支援の現場をレポートするものが多い。²⁰ 3節で述べたように、90年代には、日本の将来を示すものとしてのアメリカでの感染事例や、日本での感染事例が多く紹介されたのとは、対照的である。

しかし実際には、2000年代に至っても日本ではエイズ患者の報告数が増え続けていたし（木原／木原157）、献血血液のHIV抗体陽性率も上昇していた（木原／木原158）。つまり、HIV検査の体制が不十分なため感染に気づかず、エイズを発症して初めて慌てるケースが後を絶たなかったのである。これは、他の先進国にはない日本特有の現象であり、2次感染が増えるだけでなく、治療開始の遅れにより治療効果が下がるとして、専門家は警鐘を鳴らした。治療薬の普及を求めて世界で運動が繰り広げられていたときに、受けようと思えば十分な治療を受けられる日本では、無知と無関心ゆえに治療が進まなかったのは皮肉なことだ。

19 治療薬の普及をめぐる運動については、林および新山を参照。

20 タイのレポートは、佐保および高木を参照。アフリカのレポートは、ウーテン；グリーン；佐々木；徳永；山田を参照。

第6節 帚木蓬生『アフリカの瞳』（2004年）

(1) 小説のあらまし

そのようななか、2004年に帚木蓬生の『アフリカの瞳』が書下ろしで講談社から出版された。

帚木蓬生は精神科医でもある作家で、「医学と人間、国家と個人を問うサスペンス」（下山）で知られる。47年に福岡県小郡市で生まれた。92年の吉川英治文学新人賞（『三たびの海峡』）、95年の山本周五郎賞（『閉鎖病棟』）、97年の柴田錬三郎賞（『逃亡』）、10年の新田次郎文学賞（『水神』）など、多数の受賞歴がある。

『アフリカの瞳』の主人公である作田信も医師で、かつて心臓移植手術を学ぶためにアパルトヘイト時代の南アフリカに留学した。²¹そして反アパルトヘイト闘争にかかわるなか、貧しいアフリカ系の人々のための医療に携わろうと決意した。以上のいきさつは92年に出版された『アフリカの蹄』に詳しい。その続編である『アフリカの瞳』の物語の現在、作田は、アフリカ系の妻メラニーと小学1年生の息子とともに南アフリカに暮らし、市立病院に外科医として勤務するかたわら、低所得者層住宅地の診療所を手伝っている。妻メラニーは、市の保健センターに非常勤のソーシャルワーカーとして勤務するかたわら、診療所に併設されたコミュニティーセンターの所長を務めている。

メラニーが勤務する保健センターでは、ヴィロディンというHIVの治療薬を妊婦に無料配布してきた。²²ヴィロディンは政府が推奨する国産の治療薬であるが、作田はヴィロディンに効き目がな

21 正確に言えば、小説の舞台となっているアフリカの国の名称は、物語中で与えられていない。しかしいくつかの描写から、南アフリカが想定されていることは明らかである。

22 ヴィロディン（virodene）のスキヤングルは実話である。牧野によれば、97年に南アフリカ政府がヴィロディンという化学物質を治療薬として用いる決定をしたが、効き目がないだけでなく、安全性に問題があることがその後判明した（104-05）。

いと疑い始める。大手製薬会社による治療薬は非現実的なまでに高価であり、そのコピー薬ですら安くはないため、政府は低価格の国産薬を普及させることで国民の不満を抑えているのだと作田は考える。メラニーはコミュニティーセンターの成人学級に通う女たちを動員して、ヴィロディンを投与された妊婦たちの追跡調査を行う。

一方テムバは、作田が手伝う診療所の患者の一人で、HIVに感染している。彼は私立病院で処方されたHIV治療薬の副作用を作田に訴える。その私立病院ではもともとヨーロッパ系とインド系の患者しか診察しなかったが、最近アフリカ系の、しかもHIV陽性者のみを診察するようになり、日当付きで治療薬を配布しているという。その後作田は、テムバと同じ薬による副作用で死亡したと疑われる事例も複数見つける。作田は大手製薬会社が違法な治験を行っていると考え、テムバが追跡調査を行う。

さまざまな妨害があったものの、両追跡調査はともにクロと出る。作田はエイズの学会で両事案を発表してメディアの注目を浴び、解決の兆しが見える。

(2) 小説の評価

本作は、医療の南北問題という硬いテーマを、日本の作家が敬遠しがちなアフリカを舞台にして描く意欲作である。しかも土地に住む人々の視点から語る点も評価できる。作田の妻子の誘拐事件なども織り交ぜられ、読みやすく仕上がっている。

しかし、治療薬をめぐる現実、小説が描くよりもさらに複雑な利害関係をはらんでおり、草の根の運動もまた、さらにダイナミックに展開された。それを考えると、本作はよく書けているものの、現実を矮小化しているという批判を免れないだろう。

現実の世界においては、薬の知的所有権を主張するアメリカの製薬会社、自国の財界に有利な国際取引の仕組みを作ろうとするアメリカ政府、コピー薬を製造して自国民の治療を行いたい途上国、そもそもエイズの原因がHIVであることを否定する非主流派の科学者たち、²³彼らに影響されて治療薬に反対する南アフリカ政府、治療薬を求

めて運動する陽性者団体——こういったさまざまな関係者が、95年にアメリカ主導で「世界貿易機構」(WTO: World Trade Organization)が結成されて知的所有権保護が強力に打ち出されてから、2004年に南アフリカ全土で治療のプログラムが開始するまで、国際社会を舞台にして駆け引きをし続けた。本作はこれらの複雑な政治を単純化して、その雰囲気的一端を味わえるようにしたものだと言える。

また、アフリカの現実に少なからぬ影響を及ぼしている日本の存在も、本作で十分に描かれていない。作品中、登場人物が日本について語ることが数回あるが、その場かぎりの言及にとどまり、物語の展開には組み込まれない。言及の内容は、日本でも近い将来HIV感染が広まるだろうと警告するもの(帯木『アフリカの瞳』86-87, 285)、そして、豊かな日本と貧しいアフリカを対比して南北問題を論じるもの(56-62)である。これらはやや聞き飽きた議論であるうえ、物語の展開に関与しないため、さほど印象に残らない。物語は、アフリカのコミュニティで日常を生きる人々に視点を置いているため、国際政治を取り込みにくかったのかもしれない。しかし、HIVとともに周辺で生きる人々が国際政治の矛盾を日常生活のなかで感じるように描くことも可能だったはずだ。

『アフリカの瞳』はこのような限界を抱えており、複雑なテーマを描き切ったとはいえないものの、他の作品に比べれば、当事者意識が薄れる日本の読者がエイズに関心を持つきっかけを提供し得てはいるだろう。というのも、この時期の作品の多くは、リアリティが乏しいエイズしか描けていないからだ。

(3) その他の小説

典型的なのは、2000年代に流行したケータイ小説である。²⁴ケータイ小説の走りと言われる『Deep Love 第一部 アユの物語』(Yoshi)は、2000年に、Yoshiが運営するケータイ用サイトに掲載されて多くの女子高校生を読者として獲得し、2002年

23 これら非主流派の科学者たちについては、カリッチマンを参照。

に書籍出版された。物語では、女子高校生のアユが「援助交際」をしてエイズになる。発熱し、痩せて、咳が止まらず、「血が流れていない人形のような肌」(Yoshi 134)をして、衰弱して消え入るように死去する。

一方、2006年に書籍出版された『もしもキミが。』(凜)は、ケータイ小説がもっとも部数を伸ばしていた頃のベストセラーだ。²⁴主人公の麻樹は輸血でHIVに感染し、恋人に励まされて闘病するものの死去する。夜の世界を描く『Deep Love』とは対照的に、ごく普通の高校生活が描かれるが、熱に浮かされて痩せ衰え、命を失うエイズの主人公の描写は、共通している。

また、医師である赤枝恒雄は、東京の繁華街で「街角無料相談室」を開き、そこで見聞きした少女たちの凄惨な現実をもとに『悲しいセックス—エイズで逝ったマヤに捧げる』(2007)を書いた。ケータイ小説ではないが、書籍の判型や表紙のデザイン、文章や会話の調子がケータイ小説と似ており、物語の内容も、薬物、妊娠、売春、真実の愛というケータイ小説の定番を踏襲している。そ

24 ケータイ小説の書き手は職業作家ではないことが多い。作品は、一文が短い、情景描写が少ない、会話が多い、話の展開が分かりやすいといった特徴を持つ。読者はケータイ用サイトにアクセスして作品を読むが、人気が出た作品は、その後書籍として出版される。詳しくは本田および吉田を参照。

25 トーハンが調査している文芸書の年間ベストセラーのランキングでは、2003年にYoshiの『Deep Love』のシリーズが3位にランクインして以来、2007年まで複数のケータイ小説が以下のようにランクインしている。2004年はYoshiが6位。2005年はYoshiが1位と3位。2006年は美嘉が3位、Chacoが5位、Yoshiが6位、Chacoが10位。2007年は美嘉が1位、メイが2位、美嘉が3位、凜が5位と、ベスト5のうち4点をケータイ小説が占めるという売れ行きだった。しかし2008年以降は一冊もランクインしていない。ケータイ小説投稿サイトの老舗「魔法のiらんど」のプロデューサーだった伊東は、2007年ごろからケータイ小説が飽和状態に陥ったことを指摘している(106-21)。

して主人公は「援助交際」をしてエイズになる。治療薬の説明(赤枝 100)やエイズ特有の症状であるカポジ肉腫の描写(111-13)はあり、上の2例よりはエイズの現実に迫っているものの、主人公が衰弱して消え入るように死去するのは同様である。

これらケータイ小説の読者層である10代の少女は、感染リスクの高い行動をとっているという調査結果が当時出ていた。²⁶それにもかかわらず、物語はエイズの過酷な現実に踏み込むことなく、真実の愛に目覚めた若い命を悲劇的に絶つ道具立てとしてエイズを利用するのみである。エイズのロマン化は『愛死』よりも極端であり、エイズの現実から読者の目をそらす危険がある。

リアリティの乏しいエイズ表象は、一般向けの小説でも同様だ。

湊かなえによる『告白』(2007)では、主人公がある人物を罰するために、HIV陽性者の血液をひそかに牛乳に混ぜ、飲ませる。念のため述べるならば、現実にはそのようなやり方でHIVに感染することはない。また、感染した血液を凶器として使うという着想は、陽性者に加害性を負わすものであり、じっさいに感染して苦しんでいる人の経験が念頭にあったらけっして出てこないであろう。このような事実誤認と欠陥にもかかわらず、『告白』は「本屋大賞」を受賞しただけでなく(本屋大賞実行委員会)、映画化されて「日本アカデミー賞」の「最優秀作品賞」なども受賞した(日本アカデミー賞協会)。

80年代に逆戻りしてしまったかのような『告白』

26 木原は、1990年代半ばから、人工妊娠中絶、性感染症、エイズが若者のあいだで増加したことを報告している(35-54)。さらに、2000年前後の調査から、「相手とのターンオーバーが速くなっていて、短い期間でどんどん相手が変わっていくようになっている」(10)と警告している。ただし、2011年に行われた第7回「青少年の性行動全国調査」では、青少年の性行動の活発化が見られたのは1990年代から2000年代にかけてで、とくに女子の伸び率が顕著だったが、2010年代には男女ともに低下したことが明らかになっている(片瀬)。

のエイズ表象が広く世間に受け入れられたという事実をとっても、2000年代の日本のエイズの認識がいかに不正確で差別的だったかということが分かる。

第7節 2010年代の「個別施策」

以上、日本のエイズをめぐる言説と小説について、1980年代から2000年代まで考察してきた。80年代の排除から90年代の共感へ変容した後、一転して2000年代の無関心に収束してしまったように思われる。今後、エイズをテーマにどのような小説が書かれていくだろうか。

小説の今後を予想するにあたって、エイズをめぐる現在の社会状況をまとめておこう。おもに参考にするのは、2012年に「改正エイズ予防指針」が告示されたことを受けて、「エイズ予防財団」の編集により2012年に出版された『新エイズ予防指針と私たち——続けよう、HIVとの闘い』である。

同書のなかで宮田は、指針改正の作業班がまとめた「改正のポイント」を引用し、「個別施策層」と「NGO等との連携」が繰り返されていることを指摘している（宮田『『絵に描いた餅』からの離脱へ』46-51）。

「個別施策層」とは、1999年に「エイズ予防指針」がはじめて告示されたときにすでにあった概念で、「感染の可能性が疫学的に懸念されながらも、感染に関する正しい知識の入手が困難であったり、偏見や差別が存在している社会的背景等から、適切な保健医療サービスを受けていないと考えられるために、施策の実施において特別な配慮を必要とする人々」と定義される。具体的には、青少年、外国人、MSM（Men who have Sex with Men）すなわち男性間で性行為を行う者、性風俗産業の従事者と利用者、薬物乱用者が挙げられる（「後天性免疫不全症候群に関する」）。

ここで挙げられている集団は、いわゆる「リスク・グループ」と一致するものの、新ヶ江によれば、「リスク・グループ」は社会に対する危険因子として管理すべき集団を指すのにたいし、「個別施策層」は、社会的な差別や偏見によって脆弱

な状況に置かれており個別施策で脆弱さを取り除くべき集団を指す。「個別施策」のための予算を行政に捻出させるため、施策ターゲットを具体的に明記するようゲイの活動家自身が主張したという（新ヶ江 157-59）。

宮田によれば、2010年代初頭、感染はおもに男性の同性間の性行為によって起きており、その対策が今後の感染拡大を防ぐ鍵を握るといえる。HIV／エイズの流行は、「低流行期」（感染率がきわめて低いレベルに抑えられている）から「局限流行期」（社会全体の感染率は低いが、リスクにさらされやすい人々の間では5%を超えている集団がある）、さらには「広汎流行期」（社会全体の感染率が1%を超えている）へと移行する。日本の場合、都市部のゲイのあいだで感染率が上昇しており、「局限流行期のレベルに近づきつつあるのではないかとみる研究者もいる」（宮田『『絵にかいた餅』』36）。したがって宮田は「ゲイ・コミュニティ内部でHIV感染の予防啓発やHIV陽性者支援の対策を続けていくことは、現時点では、わが国の流行の拡大を防ぐうえで最も効果的な対策といえる」（37）と結論付けている。

さらに、「指針改正のポイント」では、啓発、予防、検査と相談体制、治療すべてにおいて「NGOとの連携」が必要とされている。ただし広く「NGO」と言っても、『新エイズ予防指針と私たち』で成功例として報告されるのは、ゲイ関係のNGOの活動が多い。²⁷エイズの活動でゲイが中心になっている原因は、彼らのあいだで実際に感染率が高いということもあるが、新ヶ江が看破するように、彼らが国家のエイズ政策に積極的に関わり、みずからをゲイ・コミュニティとして組織化してきたことが大きい。

27 具体的には、東京のNPO法人「akta」が運営するゲイ・コミュニティセンターの活動（第4章）、愛媛のゲイのNGO「HaaT えひめ」の活動（第5章）が紹介されている。一方、公益財団法人「エイズ予防財団」による一般向けの啓発キャンペーン（第6章）も挙げられている。また、第1章の鼎談で挙げられている成功例も、ゲイ・コミュニティの例である（長谷川／白阪／宮田 16, 17）。

以上のことから、2010年代のエイズ対策はゲイ中心に行われていることが推測される。新ヶ江によれば、大きな問題は、「MSM」つまり「男性と性行為を行う男性」と「ゲイ」のあいだにギャップがあることだ。「MSM」は性行動に注目する概念であるが、「ゲイ」は性的アイデンティティに注目する概念である。じっさいには男性同性間で性行為をしている、自分を「ゲイ」とみなさない場合もあり、彼らはゲイ・コミュニティに関わろうとしない。疫学的に言えば、自分自身をどう定義していようと、どのような文化を営んでいようと、コンドームを使用せずにアナルセックスをするといった性行動をとっていけばリスクが高い。つまり「ゲイ」ではなく「MSM」にアプローチしなければならないのだが、現実には、運動を通じてコミュニティとして組織化された「ゲイ」にしかアプローチできていないのである（新ヶ江とくに148）。

またもう一つの問題として、言うまでもないことだが、ゲイ以外の個別施策層、すなわち、若者、外国人、セックスワーカーとその顧客、薬物使用者には、ゲイの場合ほど効果的なアプローチができていないことが推測される。

第8節 文学の展望 ——待ち望まれる周縁の声

以上の状況を念頭に置いて、エイズをテーマにした文学が今後どう展開するかを予想してみよう。

第一に、ゲイがエイズを描く作品が今後書かれる可能性があると考えられる。海外ではすでに、当事者によって多くの作品が書かれている。また、ノンフィクションのライフストーリーであれば、日本でも何篇か出版されている。語りのモデルは存在する。今後、ゲイによる良質のフィクションが書かれることが期待できる。

一方で、ゲイ・コミュニティとは距離を置くMSMによる表現も期待できる。当事者による表現でなく、力ある作家がMSMとエイズをとりあげるような作品も考えられる。ゲイ中心のエイズの運動では十分に語られることのない彼らの想い

や経験は、文学でなら表現できるのではないか。運動の語りには回収されず、そこからこぼれ出てしまう個人の言葉を表現する作品が待たれる。

また、MSM以外の個別施策層による表現、あるいは彼らをめぐる表現も期待できる。たとえば若者のエイズ経験については、これまでケータイ小説の非現実的な作品しか書かれていない。もっとべつ物語が書かれてもよいのではないだろうか。²⁸また、外国人、セックスワーカーとその顧客、薬物使用者の多くは、しばしば取り締まりの対象であるため発言するのが難しい。感染の経験を書くことで、差別が強まる可能性もある。だからこそ、彼らの経験を表現するには、フィクションが適しているのではないだろうか。

参考文献

赤枝恒雄『悲しいセックス——エイズで逝ったマヤに捧げる』幻冬舎、2007年。

赤瀬範保『あたりまえに生きたい』木馬書館、1991年。
浅井清／佐藤勝編『日本現代小説大事典』増補縮刷版、明治書院、2009年。

浅田彰「AIDSの／AIDSによる脱構築」『未確認尾行物体』島田雅彦、文春文庫、1993年。211-17頁。

浅田彰／瀬戸内寂聴／中沢新一「エイズと文学、人間の尊厳をめぐって」1994年3月16日に東京日仏会館ホールで開催されたシンポジウムの記録。『すばる』16巻7号、1994年。180-201頁。

安部結貴『HIV マリコの場合』新潮社、2010年。
飯塚真紀子『ある日本人ゲイの告白』草思社、1993年。
家田荘子『私を抱いてそしてキスして——エイズ患者

28 初校を待つあいだに出版された『親友は、エイズで死んだ——沙耶とわたしの2000日』（今井COCO）は、キャバクラ嬢だった今井が、エイズで死去した同僚の沙耶について書いたノンフィクションである。2010年出版の『HIV マリコの場合』（安部結貴）も若い女性の経験を描いていたが、おもな舞台はアメリカだった。ノンフィクションは、等身大の若者の経験に一步一步迫っているようだ。さらに大胆に想像力を駆使して若者の性とエイズを描くフィクションが待たれる。

- と過ごした一年の壮絶記録』文藝春秋、1990年。文春文庫、1993年。
- 家西知加子『希望の子』ワニブックス、2000年。
- 石井光太『感染宣告——エイズなんだから抱かれない』講談社、2010年。『感染宣告——エイズウィルスに人生を変えられた人々の物語』講談社文庫、2013年。
- 石田吉明『いのちの輝き』岩波書店、1993年。
- 石田吉明／小西熱子『そして僕らはエイズになった』ルポルタージュ叢書38、晩聲社、1993年。
- 泉かおり『甦る女たち——アフリカの女たちの闘い——HIVエイズと財産喪失からの再生に向けて』鎌田真由子訳、よろず医療会ラダック基金、2010年。(Kaori Izumi, ed. *Reclaiming Our Lives: HIV and AIDS, Women's Land and Property Rights and Livelihoods in Southern and East Africa: Narratives and Responses*, 2006)
- 伊東寿朗『ケータイ小説活字革命論——新世代へのマーケティング術』角川SSC新書37、角川SSコミュニケーションズ、2008年。
- 伊藤操『ティナの贈りもの』TBSブリタニカ、1994年。
- 井上明『神戸エイズパニック——教訓を風化させないために』エイズ予防サポートネット神戸 39-61頁。
- 今井COCO『親友は、エイズで死んだ——沙耶とわたしの2000日』青土社、2014年。
- Iliffe(イリフエ), John. *The African AIDS Epidemic: A History*. Oxford: Currey, 2006.
- ジム・ウーテン『ほくもあなたとおなじ人間です。——エイズと闘った小さな活動家、ンコシ少年の生涯』酒井泰介訳、早川書房、2006年。(Jim Wooten, *We Are All the Same: A Story of a Boy's Courage and a Mother's Love*, 2004)
- エイズ予防サポートネット神戸編『静かに迫りくるHIV——神戸からの報告』第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議3周年記念、エピック、2008年。
- エイズ予防財団編『新エイズ予防指針と私たち——続けよう、HIVとの闘い』連合出版、2012年。
- NHK取材班編、桜井均著『埋もれたエイズ報告』三省堂、1997年。
- NHK取材班編著『NHKスペシャル エイズ危機』塩川優一監修、NHK出版、1992年。
- 大石敏寛『せかんど・かみんぐあうと——同性愛者として、エイズとともに生きる』朝日出版社、1995年。
- 大江健三郎『治療塔——近未来SF』岩波書店、1990年。
- 片瀬一男「第7回『青少年の性行動全国調査』の概要」『『若者の性』白書——第7回青少年の性行動全国調査報告』日本性教育協会編、小学館、2013年。9-24頁。
- 『神さま、もう少しだけ』武内英樹演出、金城武／深田恭子主演、フジテレビ制作、1998年放映。DVD、フジテレビ、2003年。
- セス・C・カリッチマン『エイズを弄ぶ人々——疑似科学と陰謀説が招いた人類の悲劇』野中香方子訳、化学同人、2011年。(Seth C. Kalichiman, *Denying AIDS: Conspiracy Theories, Pseudoscience, and Human Tragedy*, 2009)
- 川田龍平『日本に生きるということ——薬害エイズ被害者が光を見つけるまで』講談社、2007年。
- 『龍平の現在』三省堂、1996年。
- 河野健一郎「エイズ政策のグローバルトレンド」牧野／稲場 1-39頁。
- 菊池治『つくられたAIDSパニック——疑惑の「エイズ予防法」』桐書房、1993年。
- 北沢杏子編『エイズ集中講義』アーニ出版、1999年。
- 北山翔子『神さまがくれたHIV』紀伊國屋書店、2000年。増補新装版、2010年。
- 木原雅子『10代の性行動と日本社会——そしてWYSH教育の視点』ミネルヴァ書房、2006年。
- 木原正博／木原雅子「世界と日本におけるエイズ流行と対応の変遷——“The epidemic's future is still uncertain”」エイズ予防サポートネット神戸 141-69頁。
- 木村功「エイズのイデオロギー」『日本文学』50巻9号、2001年。50-61頁。
- 「エイズの表象」『日本近代文学』63号、2000年。100-15頁。
- 草伏村生『冬の銀河』不知火書房、1992年。
- メリッサ・フェイ・グリーン『あなたがいるから、わたしがいる——アフリカの子どもたちを救ったある女性の記録』入江真佐子訳、ソフトバンククリエイティブ、2008年。(Melissa Fay Greene, *There Is No Me Without You: One Woman's Odyssey to Rescue Her Country's Children*, 2006)
- 胡桃沢耕史『東京保安官——AIDS防止大作戦』FUTABANOVELS、双葉社、1993年。
- ミルコ・D・グルメク『エイズの歴史』中島ひかる

- ／中山健夫訳、藤原書店、1993年。(Mirko Dražen Grmek, *Histoire du sida*, 1990)
- エリザベス・グレイザー『天使のいない街』翔田朱美訳、共同通信社、1993年。(Elizabeth Glaser and Laure Palmer, *In the Absence of Angels*, 1991)
- 「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」2012年1月19日、厚生労働省告示第21号。ウェブ上のPDFファイル。『厚生労働省』→政策について→分野別の政策一覧→健康・医療→健康→感染症・予防接種情報→感染症情報→感染症別情報→HIV／エイズ。2014年9月22日アクセス。
- 「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律の施行について」1987年2月10日、厚生省発健医第22号、厚生事務次官依命通知。ウェブ上に記載。エイズ予防財団『API-Net エイズ予防情報ネット』→資料室→対策関係資料→エイズ対策関係法令。2014年9月22日アクセス。
- 「“コンドームCM” 好感度68%」『読売新聞』夕刊、1993年7月5日、18頁。
- 佐々木恭子『それでも、笑顔で生きていく。——私が出会ったHIV／エイズの子どもたち』扶桑社、2009年。
- 佐藤和久『病へのまなざし——日本におけるジェンダーとHIV／AIDS像の構築』『ジェンダーで学ぶ文化人類学』田中雅一／中谷文美編、世界思想社、2005年。269-85頁。
- 佐保美恵子『生きるって素敵なこと！——名取美和が問いかける「幸せのかたち」』講談社、2003年。
- バルバラ・サムソン『不真面目な十七歳』鳥取絹子訳、紀伊國屋書店、1996年。(Barbara Samson, *On n'est pas sérieux quand on a dix-sept ans*, 1994)
- ロバート・サンチェス『父親になったジョナサン』上田勢子訳、大月書店、2005年。(Robert Sanchez, “Jonathan’s Journey: The Boy Who Would Not Die,” 2004)
- 塩川優一『私の「日本エイズ史」』日本評論社、2004年。
- 島田雅彦『未確認尾行物体』文藝春秋、1987年。文春文庫、1993年。
- 「島田雅彦」日外アソシエーツ 377頁。
- 志村岳『企業戦士エイズと闘う』講談社、1993年。
- 『止まらない時計——エイズに感染した日本人の妻、夫、恋人たち』小学館、1993年。
- 下山嬢子「帚木蓬生」浅井／佐藤 1322頁。
- ジュリエット『なぜ 私が——エイズ患者の告白』宇田川悟訳、朝日新聞社、1988年。(Juliette, *Pourquoi moi?* 1987)
- アーヴィン・マジック・ジョンソン『マジック・ジョンソンのエイズにかからない方法』水上峰雄訳、集英社、1992年。『マジック・ジョンソンのエイズをもっとよく知るための本』集英社文庫、1996年。(Earvin “Magic” Johnson, *What You Can Do to Avoid AIDS*, 1992)
- アーヴィン・マジック・ジョンソン／ウィリアム・ノヴァク『MY LIFE——マイライフ』池央耿訳、光文社、1993年。(Earvin “Magic” Johnson with William Novak, *My Life*, 1992)
- 新々江章友『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ、国家、アイデンティティ』青弓社、2013年。
- ジョナサン・スウェイン／シャロン・シーリング『ぼくはジョナサン……エイズなの』山本直英訳、大月書店、1992年。(Sharon Schilling and Jonathan Swain, *My Name Is Jonathan (And I Have AIDS)*, 1989)
- ジョナサン・スウェイン『ジョナサンのニッポン日記』山本直英訳、ジョナサン君とともにエイズを学ぶ会編、大月書店、1994年。(Jonathan Swain)
- 瀬戸内寂聴『愛死』講談社、1994年。講談社文庫、上下、1997年。
- 「瀬戸内寂聴」日外アソシエーツ 417頁。
- 高木智彦『スマイル！——タイ「希望の家」の子供たちとの500日』角川書店、2005年。
- 東京HIV訴訟原告団『薬害エイズ原告からの手紙』三省堂、1995年。
- 東京HIV訴訟弁護団『薬害エイズ裁判史』1巻訴訟編、2巻運動編、3巻真相究明編、4巻恒久対策編、5巻薬害根絶編、日本評論社、2002年。
- 徳永瑞子『シンギラ ミンギ——アフリカでエイズ患者と共に生きて』サンパウロ、2001年。
- トーハン「年間ベストセラー」2003年から2008年。ウェブ上のPDFファイル。『トーハン』→ベストセラー→年間アーカイブ。2014年9月22日アクセス。
- 中川重徳「エイズ予防法を読む」北沢 116-19頁。
- 梨木香歩『ピスタチオ』筑摩書房、2010年。ちくま文庫、2014年。
- 名取美和『しあわせのハードル——タイでエイズ孤児

- たちと暮らして』御茶の水書房、2013年。
- 新山智基『世界を動かしたアフリカの陽性者運動——生存の視座から』生活書院、2011年。
- 西野瑠美子『薬害エイズを生きる——帝京大病院血友病患者 島田照国の記録』明石書店、1996年。
- 日外アソシエーツ編『新訂 作家・小説家人名事典』紀伊國屋書店、2002年。
- 日本アカデミー賞協会「第34回日本アカデミー賞優秀作品」ウェブ上に記載。『日本アカデミー賞』→受賞結果一覧。2014年9月22日アクセス。
- 根岸昌功「エイズが問いかけるもの」北沢 14-22頁。
- 長谷川博史、白阪琢磨、宮田一雄「HIVにかかわる人びとの『顔の見えるつながり』をつくりだそう——新予防指針を生かす地域のネットワーク」エイズ予防財団 13-26頁。
- 帯木蓬生『アフリカの蹄』講談社、1992年。
- 『アフリカの瞳』講談社、2004年。講談社文庫、2007年。
- 「帯木蓬生」日外アソシエーツ 594頁。
- 林達雄『エイズとの闘い——世界を変えた人々の声』岩波ブックレット 654、岩波書店、2005年。
- 平田豊『あと少し生きてみたい——ぼくのエイズ宣言』集英社、1993年。
- 広瀬弘忠『エイズへの挑戦——患者・科学者・メディア・社会』新曜社、1989年。
- 福田慶一郎『ゴッド・プレス・ミー——エイズとの闘い』新風舎文庫、新風舎、2006年。
- 保坂渉『薬害エイズはなぜ生まれたのか』北沢 102-06頁。
- 「ホモ愛好者に凶報」『朝日新聞』1981年7月5日、7頁。
- 本田透『なぜケータイ小説は売れるのか』ソフトバンク新書 63、ソフトバンククリエイティブ、2008年。
- 本屋大賞実行委員会「2009年度本屋大賞」ウェブ上に記載。『本屋大賞』→これまでの本屋大賞。2014年9月22日アクセス。
- 牧野久美子／稲場雅紀編『エイズ政策の転換とアフリカ諸国の現状——包括的アプローチに向けて』アジア研トピックリポート 52、アジア経済研究所、2005年。
- 牧野久美子「ボツワナ・南アフリカ——エイズ治療規模拡大への課題」牧野／稲場 93-113頁。
- 湊かなえ『告白』双葉社、2008年。
- 宮田一雄『『絵に描いた餅』からの離脱へ——改正エイズ予防指針の背景と課題』エイズ予防財団 27-51頁。
- 『世界はエイズとどう闘ってきたのか——危機の30年を歩く』ポット出版、2003年。
- Miller(ミラー), Elizabeth. *A Borderless Age: AIDS, Gender, and Power in Contemporary Japan*. Diss. Harvard U, 1994. Ann Arbor: UMI, 1994.
- 宗像恒次／森田眞子／藤澤和美『日本のエイズ』明石書店、1994年。
- 宗像恒次／田島和雄編著『エイズとセックスレポート／JAPAN——感染爆発のきざし』日本評論社、1992年。
- 村上龍『KYOKO』集英社、1995年。
- 『メランコリア』集英社、1996年。集英社文庫、2000年。
- 山下柚実／児玉秀治『それじゃあグッドバイ——平田豊・最後のメッセージ』白夜書房、1994年。
- 山田耕平『自分に何ができるのか？——答えは現場にあるんだ——青年海外協力隊アフリカの大地を走る』東邦出版、2007年。
- 山本文緒『きっと君は泣く』光文社カッパノベルズ、1993年。角川文庫、1997年。
- 山本亮介「島田雅彦」浅井／佐藤 1254頁。
- 「「勇気ある起立」に拍手」『読売新聞』1994年8月8日、18頁。
- Yoshi『Deep Love 第一部 アユの物語』、Yoshi『ザブン』（ケータイ用サイト）、2000年。スターツ出版、2002年。
- 吉田悟美一『ケータイ小説がウケる理由』マイコミ新書、毎日コミュニケーションズ、2008年。
- 吉松満秀『原告番号十二番——エイズ・血友病と闘った四十一年』葦書房、1995年。
- 吉本ばなな『SLY』幻冬舎、1996年。『SLY 世界の旅②』幻冬舎文庫、1999年。
- グスタフ・ヨンソン／ブリット・ヨンソン『感染——エイズ!! 感染した医師とその妻の記録』ビヤネール多美子／多勢真理訳、学陽書房、1989年。(Gustav Jonsson and Britt Jonsson, *Smittad*, 1988)
- 凜『もしもキミが。』『魔法のiらんど』（ケータイ用サイト）、掲載年不明。ゴマブックス、2006年。
- 和久峻三『エイズ街の連続殺人——長編法廷サスペンス』講談社ノベルズ、1987年。

表 エイズに関連した物語作品および出来事

書籍出版された作品のみ掲載。翻訳作品は原書の出版年を（ ）内に表記。フィクションは雑誌の初出を（ ）内に表記。

年	フィクション		ノンフィクション	出来事
	純文学系	大衆文学系		
1981				4月CDCが「奇病」を報告
1982				7月CDCがAIDSと命名
1983				5月フランスでウイルス分離。7月帝京大症例（血友病患者）が死亡
1984				
1985				3月日本人の第1号患者（アメリカ在住ゲイ）報告
1986				11月松本事件（フィリピン人「セックスワーカー」）。第1次エイズパニック始まる
1987	島田雅彦『未確認尾行物体』（『文學界』など86～87）	和久峻三『エイズ街の連続殺人——長編法廷サスペンス』（『小説現代』87）		1月神戸事件（ギリシャ人船員から感染した日本人「セックスワーカー」）。1月エイズサーベイランス委員会が「エイズ元年」と発表。2月高知事件（血友病患者から感染した女性が出産）。3月エイズ予防法（後天性免疫不全症候群の予防に関する法律）案が提出される
1988			ジュリエット『なぜ私が——エイズ患者の告白』（87）	12月エイズ予防法成立
1989			グスタフ・ヨンソン／ブリット・ヨンソン『感染——エイズ!! 感染した医師とその妻の記録』（88）	2月エイズ予防法施行。5月薬害エイズ訴訟始まる
1990	大江健三郎『治療塔——近未来SF』（『へるめす』89～90）		家田荘子『私を抱いてそしてキスして——エイズ患者と過ごした一年の壮絶記録』	
1991			赤瀬範保『あたりまえに生きたい』	11月マジック・ジョンソンが感染告白
1992			アーヴィン・マジック・ジョンソン『マジック・ジョンソンのエイズにかからない方法』（92）、ジョナサン・スウェイン／シャロン・シーリング『ぼくはジョナサン…エイズなの』（89）、草伏村生『冬の銀河』	7月NHKスペシャル「エイズ危機」放映。第2次エイズパニック始まる。10～12月東京都がエイズのコマースナル放映。10月平田豊が記者会見
1993	山本文緒『きつと君は泣く』	胡桃沢耕史『東京保安官——AIDS防止大作戦』（『小説推理』）	アーヴィン “マジック” ジョンソン／ウィリアム・ノヴァク『マイライフ』（92）、志村岳『企業戦士エイズと闘う』、石田吉明／小西熱子『そして僕らはエイズになった』、石田吉明『いのちの輝き』、エリザベス・グレイザー『天使のいない街』（91）、飯塚真紀子『ある日本人ゲイの告白』、志村岳『止まらない時計——エイズに感染した日本人の妻、夫、恋人たち』、平田豊『あと少し生きてみたい——僕のエイズ宣言』	
1994	瀬戸内寂聴『愛死』（『読売新聞』93～94）		ジョナサン・スウェイン『ジョナサンのニッポン日記』、山下柚実／児玉秀治『それじゃあグッドバイ——平田豊・最後のメッセージ』、伊藤操『ティナの贈りもの』	8月第10回国際エイズ会議が横浜で開催
1995	村上龍『KYOKO』		東京HIV訴訟原告団『薬害エイズ原告からの手紙』、吉松満秀『原告番号十二番——エイズ・血友病と闘った四十一年』、大石敏寛『せかんど・かみんぐあうと——同性愛者として、エイズとともに生きる』	7月薬害エイズ抗議活動「あやまってよ'95人間の鎖」
1996	村上龍『メランコリア』（『小説すばる』94～96）、吉本ばなな『SLY』		バルバラ・サムソン『不真面目な十七歳』（94）、川田龍平『龍平の現在』、西野瑠美子『薬害エイズを生きる——帝京大病院血友病患者 島田照国の記録』	HIVの治療法（ART）確立。1月国連合同エイズ計画（UNAIDS）発足。3月薬害エイズ訴訟和解。

年	フィクション		ノンフィクション	出来事
	純文学系	大衆文学系		
1997				
1998		ドラマ『神様、もう少しだけ』		10月新感染症法（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）公布。12月南アで治療と行動キャンペーン（TAC）が治療薬を求めて運動開始
1999				4月新感染症法施行。エイズ予防法廃止。10月エイズ予防指針（後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針）告示
2000			北山翔子『神様がくれたHIV』、家西知加子『希望の子』	1月国連安全保障理事会でHIV／エイズ問題を討議。7月G8九州沖縄サミットで沖縄感染症対策イニシアチブ発表
2001			徳永瑞子『シンギラ ミンギ——アフリカでエイズ患者と共に生きて』	4月南アで製薬会社が提訴取り下げ。6月国連エイズ特別総会（UNGASS）
2002		Yoshi『Deep Love 第一部アユの物語』（『ザブン』00）		1月世界エイズ・結核・マラリア対策基金発足
2003			佐保美恵子『生きるって素敵なこと！——名取美和が問いかける「幸せのかたち」』	1月アメリカ大統領エイズ救済緊急計画（PEPFAR）発表。12月WHOとUNAIDSが3by5イニシアチブ発表
2004	帯木蓬生『アフリカの瞳』（『アフリカの蹄』92）			
2005			ロバート・サンチェス『父親になったジョナサン』、高木智彦『スマイル！——タイ「希望の家」の子どもたちとの500日』	
2006		凜『もしもキミが。』（『魔法のiらんど』）	福田慶一郎『ゴッド・ブレス・ミー——エイズとの闘い』、ジム・ウーテン『ほくもあなたとおなじ人間です。——エイズと闘った小さな活動家、ンコシ少年の生涯』（04）	3月エイズ予防指針改正
2007	湊かなえ『告白』（『小説推理』07～08）	赤枝恒雄『悲しいセックス——エイズで逝ったマヤに捧げる』	川田龍平『日本に生きるということ——薬害エイズ被害者が光を見つけるまで』、山田耕平『自分に何ができるのか？——答えは現場にあるんだ——青年海外協力隊アフリカの大地を走る』	
2008			メリッサ・フェイ・グリーン『あなたがいるから、わたしがいる——アフリカの子どもたちを救ったある女性の記録』（06）	
2009			佐々木恭子『それでも、笑顔で生きていく。——私が出会ったHIV／エイズの子どもたち』	
2010	梨木香歩『ピスタチオ』（『ちくま』08～10）		泉かおり『甦る女たち——アフリカの女たちの闘い——HIVエイズと財産喪失からの再生に向けて』（06）、北山翔子『神様がくれたHIV』増補新装版、安部結貴『HIVマリコの場合』、石井光太『感染宣告——エイズなんだから抱かれない』	
2011				
2012				1月エイズ予防指針再改正
2013			名取美和『しあわせのハードル——タイでエイズ孤児たちと暮らして』	
2014			今井COCO『親友は、エイズで死んだ——沙耶と私の2000日』	